女子短大生の対人距離に関する相手の年齢と性の要因の検討

池上貴美子

(甲子園短期大学・幼児教育保育学科)

キーワード: 対人距離, 相手の年齢と性, 専攻間差, 学修経験

The Effects of Other's Age and Sex on Interpersonal Distance of Women's Junior College Students

Kimiko IKEGAMI

(Koshien Junior College)

Key Words: interpersonal distance, other's age and sex, differences among majors, learning experiences

目 的

女子短大生を対象として、投映法による対人距離テストを用いて対人距離を測定し、対人距離に及ぼす相手の年齢と性の要因について検討する。また学生の属する専攻における学修経験の対人距離に及ぼす影響について、専攻間の差と学年間の差を分析することから明らかにする(池上, 2015)。

方 法

参加者 兵庫県下の女子短期大学の学生 113 名。記入漏れ等を除き実際に分析された参加者は 102 名で平均年齢 19.07 歳。専攻は生活環境、介護福祉、幼児教育保育の 3 専攻とした。**対人距離の測定** 北川(1998)の投映法による対人距離テストにより集団実験が施行。刺激は A4 版用紙の平面図で縦中央に点線が描かれ、その上部には相手人物、下部には参加者自身がそれぞれの頭部を○印で示され 1 対 1 で対面する場面として描かれた。参加者は相手と対話する際に最も適当だと思う(接近)距離に自分の位置を○印で示すよう求められた。相手人物には 8 年齢(乳児/幼児/小学生/中学生/高校生/同年齢/中年/老年)と性(男/女)の異なる見知らぬ他人 16 人が設定され、ランダム順で提示された。参加者と相手人物の頭部は直径 20mm の円、両者の初期位置の頭部間距離は、中央部縦線上 200mm 離して描かれた。参加者が平面図に記入した○印の中心から相手人物の中心までの距離が対人距離スコアとされた。冊子全体は表紙、例、16 人物の計 18 頁で構成された。

倫理的配慮 甲子園短期大学の倫理委員会による審査を受け承認された(承認番号 15-02)。調査は無記名で参加者の回答内容は全体的傾向を知るために統計処理され、個別に検討公表されることはなく、分析後破棄することを表紙に記載し説明した後、同意の得られた学生を対象に調査が行われた。

結 果 と 考 察

【Ⅱ回生における専攻間差と相手の年齢と性による差】

各学年の対人距離スコアの平均値について、専攻(3)×相手の年齢(8)×性(2)の 3 要因分散分析を行なった結果、Ⅱ回生では、専攻(F(2, 48)=5.386, p<.10)、年齢(F(7, 336)=73.492, p<.001)、性(F(1, 48)=54.104, p<.001)の主効果と、専攻×年齢(F(14, 336)=3.296, p<.001)、年齢×性(F(7, 336)=7.786, p<.001)の交互作用が有意であった。Fig. 1 のように対人距離は幼児教育保育が介護福祉よりも近く、交互作用の分析結果、乳児と老年には専攻差がないが、他年齢において有意差がみられた。また生活環境は介護福祉よりも、高校生と同年齢と中年において対人距離が近かった。各専攻における相手の年齢差も有意であった;生活環境(F(7, 336)=16.775, p<.001)、介護福祉(F(7, 336)=45.669, p<.001)、幼教保育(F(7, 336)=17.661, p<.001)。ライアン法により幼教保育と生活環境の対人距離は、乳児≒幼児<小学生≒老年<中学生≒高校生≒同年齢<中年で、介護福祉は乳児<幼児≒小学生≒老年<中学生≒高校生≒同年齢<中年の順に大きかった。全体として女子短大生の対人距離は、乳幼児や子どもやお年寄りに近く、やがて異性を感じる人達には距離を取り、中年には最も遠か

った。

相手の性の要因に関して、交互作用の分析より、相手が男性の場合、乳児<幼児<小学生≒老年<中学生≒高校生≒同年齢<中年であったが、相手が女性の場合は、乳児<幼児<小学生≒老年≒同年齢<中学生≒高校生≒中年であった。つまり女子短大生は、同年齢の女性を男性ほどは遠ざけず、小学生や老女と同じ近さを示し、中年女性に対しても中高生の女子と同様の距離を示し、相手の性の効果は一樣ではなかった。相手の性は、乳児、幼児、小学生、老年においては有意差はないが、中・高校生、同年齢、中年では男性の相手は女性よりも有意に遠かった。

【Ⅰ回生における専攻間差、相手の年齢と性による差】

Ⅰ回生においても、専攻(3)×年齢(8)×性(2)の 3 要因分散分析の結果、年齢と性の主効果と年齢×性の交互作用がみられたが、専攻間の差は見られなかった。つまりⅠ回生においては、対人距離の専攻による差はまだ生じていなかった。

【学年による差】

各専攻において、学年(2:Ⅰ回生,Ⅱ回生)×相手の年齢(8)×性(2)の 3 要因分析の結果、幼児教育保育では学年の主効果が有意な傾向がみられ(F(1, 61)=2.838, .05<p<.10)、Ⅱ回生がⅠ回生よりも対人距離が有意に近く、専攻における 2 年間の学修経験が本結果をもたらしたことが推察された。すなわち、人との親密な関係性を構築するための知識の習得や、4 回の実習等による子どもや大人(保育者や保護者の方たち)との学修経験の積み重ねが、具体的な人への接近的対応を増やし、人への親和性や好意度を高めた結果、対人距離が近くなる方向性が導かれたことが推察される。生活環境と介護福祉においては学年間の有意差はなかった。各専攻での年齢と性の主効果、年齢×性の交互作用はそれぞれ有意であった。

引用文献

池上貴美子 2015 女子短大生の対人距離に関する相手の年齢と性の要因の検討 甲子園短期大学紀要, 33, 11-17.
北川歳昭 1998 教室の座席行動と個人空間—教師への距離の調整としての学生の座席位置— 実験社会心理学研究 38, 125-135.

Fig.1 Ⅱ回生の専攻別対人距離